

歴史的街区における生活環境計画に関する研究

－犯罪発生状況による分析－

日大生産工（院） ○牛丸 将成
日大生産工 宮崎 隆昌

1.研究背景と目的

京都は歴史的に街路空間と地域生活が密接な関係性を持っている。以前の街路は人々の交流・滞留の場として機能していたが、高度経済成長と共に自動車交通中心の社会へと変貌した。自動車の普及と共に、経済情勢や都市空間が急激に変化した事で、近隣住民とのコミュニティが薄れ、悪質・巧みな犯罪が日々生み出されてきた。本研究では、犯罪は加害者と被害者の相互行為のみならず、生活の不均衡さや空間の矛盾、死角等といった空間構成的要因が犯罪を誘発しているのではないかと仮定し、安心して安全な暮らしの実現の為に犯罪機会を減らす防犯的空間を確立する事を目的とする。

2.取扱う犯罪の定義

京都府の犯罪統計書¹⁾によると、京都の刑法犯全体の 76.5%が窃盗犯で構成されているが、近年は窃盗犯認知件数が減少傾向にある。尚、かつて、増加傾向にあった犯罪も、セキュリティシステムの強化により徐々に抑制されてきた。本研究では、刑法犯罪のうちの窃盗犯（乗り物盗と非侵入盗の街頭犯罪）を対象とする。

3.本研究の位置づけ

防犯環境デザイン研究会²⁾は、以前防犯に関するアプローチは犯罪者や犯罪者の社会的状況を治す事に注目されてきたが、近年、物理的環境が人間の行動に影響を及ぼし、極めて「犯罪誘因」となりやすいという考え方が支持されている。守りやすい空間、CPTED、状況的犯罪予防、環境犯罪学の4つの理論に基づき、犯罪発生場所の空間的特性に焦点を当て犯罪原理に結びつける。

4.研究対象

京都市中京区は商業・ビジネスの中心であり、夜間人口も多い。街路は基盤の目を基本とした都市構造が現在も残っている。本研究では京都市中京区の堀川通～河原町通・押小路通～四条通で囲まれた範囲を研究対象とする。

5.研究方法

2003 年度の研究対象地内の街頭犯罪のデータを基に、以下のように研究を進める(Fig.1)。

- ① 街頭犯罪発生地点を GIS にプロットする。
- ② 街頭犯罪の密度を可視化する。
- ③ 街頭犯罪発生地点と街路との関連をみる。

研究対象地内の街頭犯罪と街路の関係から犯罪発生傾向や都市空間の物理的環境が与える犯行の実行しやすさに関する評価を行う。

6.街頭犯罪の分布

研究対象地内で 2003 年度に発生した街頭犯罪は 757 件であるが、不明点 49 件を除く 709 件を考える。犯罪対象としては、「自転車盗み」、「車上狙い」、「オートバイ盗み」、「自動販売機荒し」、「ひったくり」、「すり」、「部品盗み」、「仮眠者狙い」、「置き引き」、「その他」の 10 項目に分類する(Tab.1)。

Tab.1 対象地域内の犯罪種別

種別	件数	発生率
自転車盗み	408 件	53.9%
車上狙い	138 件	18.2%
オートバイ盗み	90 件	11.9%
自動販売機荒し	22 件	2.90%
ひったくり	23 件	3.04%
すり	12 件	1.60%
部品盗み	6 件	0.79%
仮眠者狙い	3 件	0.40%
置き引き	5 件	0.66%
その他	2 件	0.26%
不明	49 件	6.47%

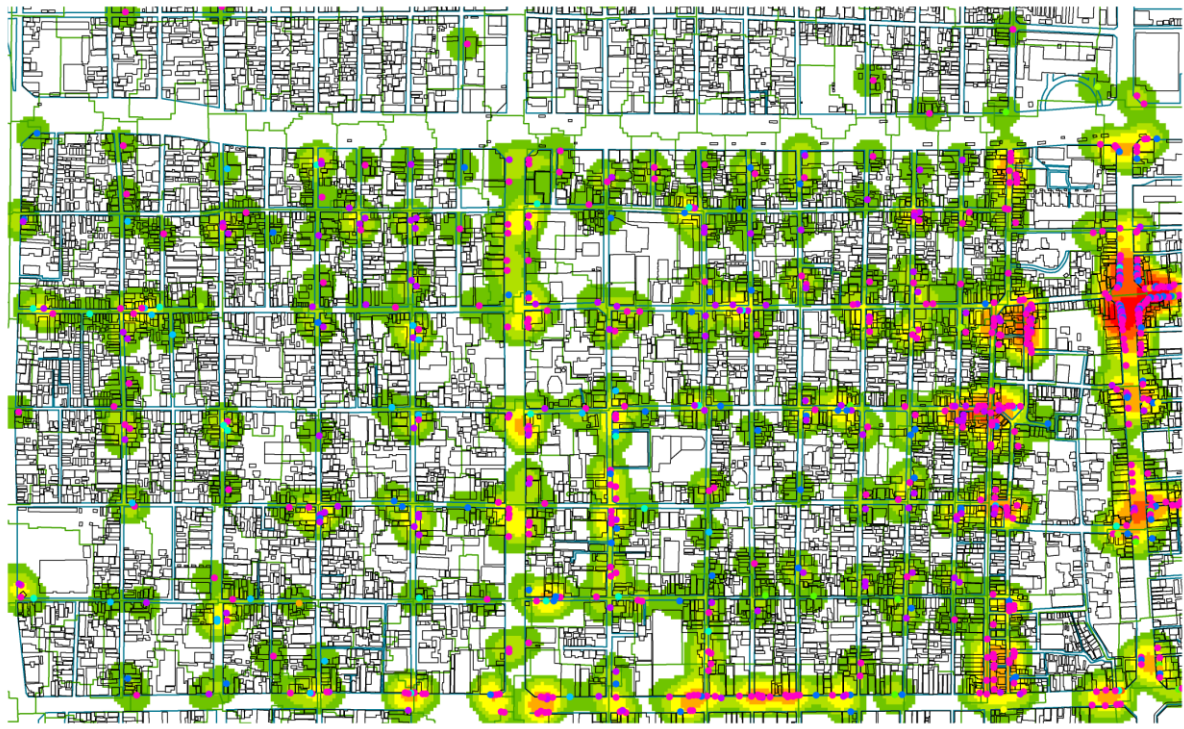


Fig.1 街頭犯罪の分布及び密度

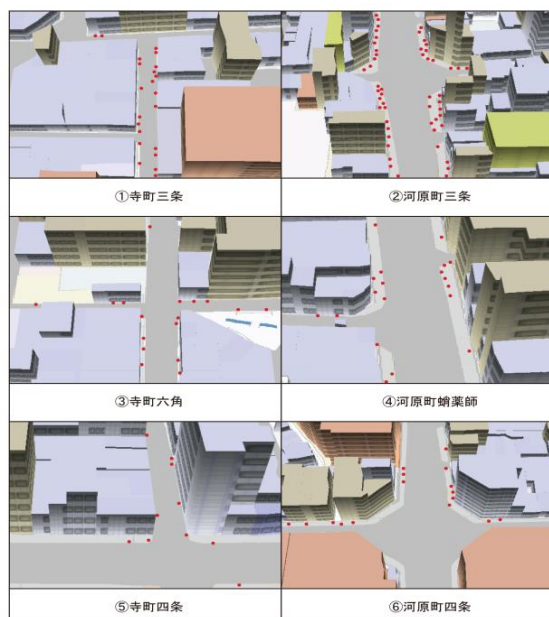


Fig.2 犯罪多発地域の空間構造

6-1. 街頭犯罪発生の密度

犯罪のポイント分布に対し、一定範囲内のポイントを数え密度を求め、その密度に応じて曲面を描くカーネル平滑化をする事により犯罪密度を可視化した。局地的に人通りの激しい場所に犯罪が集中している事が読み取れる。犯罪多発地域の空間構造を Fig.2 に示す。

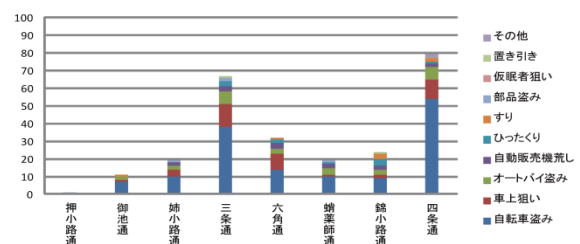


Fig.3 街路別犯罪件数割合（東西方向）

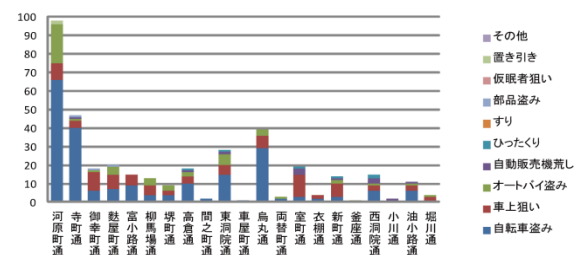


Fig.4 街路別犯罪件数割合（南北方向）

7. 研究分析

7-1. 街頭犯罪と街路の関係

10 項目に分類した犯罪種別を街路別に東西方向、南北方向に分けて犯罪件数割合をみると、河原町通や寺町通のように商店街となっている街路は犯罪件数が大きな値を示している (Fig.3, Fig.4)。特にその中で顕著に大きな割合を占める「自転車盗み」に着目する。

現在、京都市が歩道上のスペースを民間に貸し整備した有料駐車場を整備した事により、放置自転車の減少に効果を上げているが、2003年は放置自転車が著しく、歩行者の通行を妨げ、安心して歩行する事の出来ない環境となっていた。島田ら³⁾は犯罪不安と被害リスク知覚の認知構造とその形成要因について分析を試み、様々な被害見聞を通してゴミや落書き等の地域の無秩序性から犯罪不安をもたらすだけでなく、財産犯被害不安を直接生起させる事を示した。この事から、放置自転車の著しい増加は犯罪を助長させる要因の一つであると考えられる。

6-2.街頭犯罪と幅員の関係

街路の幅員を8段階に分類し、街頭犯罪と幅員の特性を見出す(Fig.5).

Tab.2 より、各幅員に対する犯罪件数を一本当たりの道路本数でみると10m以上が4.2件、7~8mが3.8件である。この事から比較的幅広い街路で街頭犯罪が多く発生している事が分かる。これは、「場所の領域性」が影響を及ぼしているのではないかと考えた。京都の市街地には、居住空間から道路にあふれ出した植栽等がよく見受けられる。青木ら⁴⁾の路地空間に関する研究では、住民の些細なあふれ出しの行為が住民のコミュニティを強化する広い意味での領域化の可能性が示唆されると述べている。英国や米国ではコミュニティ防犯と総称しているが、街路の幅員が狭いほど、居住者の目が確保され監視性が得られる為、犯罪者の接近を防ぐ犯罪抑止性が高いと考えられる。

6-3.街頭犯罪と交差点の関係

Fig.1 から街頭犯罪は交差点に高い割合で分布しているのではないかと考え、街頭犯罪と交差点の関係を検討する(Fig.6).

街頭犯罪全体に対して、交差点で街頭犯罪が起こる割合を Fig.7 に示す。分析方法として、10m以上の街路には40mのバッファ、10m未

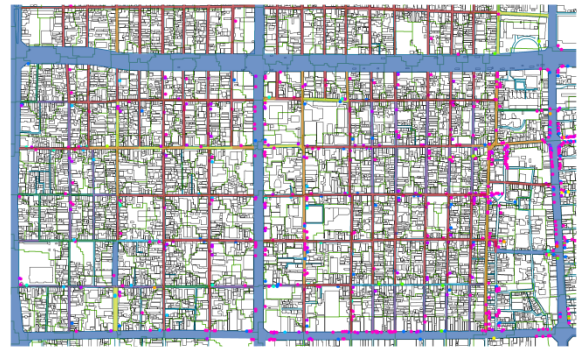


Fig.5 街頭犯罪と幅員の関係

Tab.2 幅員別犯罪の起こりやすさ

幅員	犯罪件数	本数	一本あたりの犯罪件数
4m 以下	6 件	6 本	1 件
4~5m	6 件	11 本	0.55 件
5~6m	56 件	30 本	1.9 件
6~7m	197 件	130 本	1.5 件
7~8m	80 件	21 本	3.8 件
8~9m	19 件	10 本	1.9 件
9~10m	0 件	1 本	0 件
10m以上	266 件	64 本	4.2 件

注) 本数: 交差点から交差点までの道路を一つの本数とする。

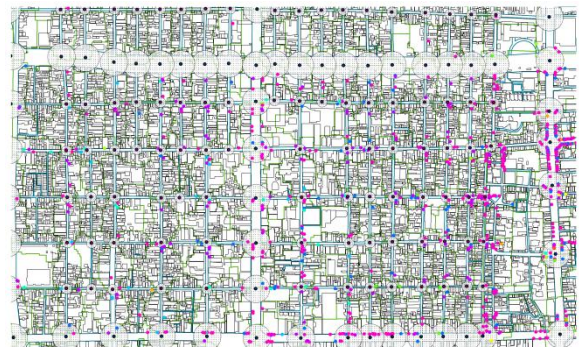


Fig.6 街頭犯罪と交差点の関係

満の街路には15mのバッファで囲い、バッファ内に含まれる犯罪件数を統計し、考察する。

調査結果として、街頭犯罪全体のうち296件(42%)が交差点で発生する事が明らかとなった。交差点296件のポイントのうち、15mのバッファに含まれるポイントは69件、40mのバッファに含まれるポイントは227件発生している。

Tab.3 京都府の窃盗犯発生場所別認知件数（認知件数 100 件を超える場所）

道路上	4,750 件	総合スーパー	1,250 件	ホームセンター	256 件	都市公園	131 件
中高層住宅	4,283 件	学校(幼稚園含む)	1,068 件	ゲームセンター	225 件	深夜飲食店	130 件
一戸建て住宅	3,687 件	会社事務所	852 件	ドラッグストア	215 件	家電量販店	129 件
駐輪場	3,306 件	コンビニエンスストア	523 件	病院・診療所	210 件	駐車場・コイン P	124 件
その他の住宅	2,223 件	飲食店(深夜除く)	371 件	デパート	182 件		
月極駐車場	2,189 件	パチンコ・麻雀等	315 件	神社・仏閣	151 件		

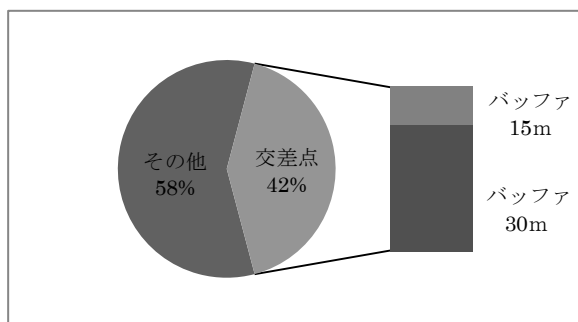


Fig.7 交差点で犯罪が起こる割合

交差点の街頭犯罪が多い理由として、2 方向以上の交差点は、犯罪心理的に逃げやすく、犯行を実行しやすいのではないかと考えられる。

7.街頭犯罪と空間特性

京都府の窃盗犯発生場所認知件数が 100 件を超える場所をみると、「道路上」の犯罪が最も多い事が分かる (Tab.3)。対象地域は基盤の目の都市構造が現在まで残り続けている為、

「見通しの確保」の面では犯罪の発生抑制に対し優れていると言えるが、高度経済成長とともに普及率が激増した自動車が、街路の形状や機能に大きな変化をもたらし、コミュニティや安全性の低下が犯罪不安を招いた。これが最も窃盗犯の認知件数が多くなった要因と考えられる。

8.まとめ

本研究では、京都市中京区の対象地域で発生した 2003 年度の街頭犯罪から街路に着目し、犯罪発生場所の傾向や都市空間の物理的環境が与える犯行の実行しやすさに関する評価を行った。その結果を以下に記す。

・街頭犯罪と街路の関係では犯罪多発地域（河

原町通と寺町通）の中で「自転車盗み」に着目し、放置自転車といった地域の無秩序性から自転車盗みを助長させる要因の一つであると考えた。

・街頭犯罪と幅員の関係では「場所の領域性」が犯罪発生に影響を及ぼしていると考え、幅員が狭いほど監視性が得られ、犯罪者の接近を防ぐ犯罪抑止性が高いと導いた。

・街路と交差点の関係では交差点での犯罪が 42%を占めている為、2 方向以上の交差点は犯罪心理的に逃げやすく、犯行を実行しやすいのではないかと考えた。

今回得られた知見を基に、今後犯罪行為と犯罪に至るまでの日常的活動を分析し、犯罪機会を減らす防犯的空間について追究する。

【謝辞】

本研究を進めるにあたり、眞智香苗らにより調査・作成されたデータを使用させて頂きました。当時、御協力戴いた京都府警察本部、五条警察署、旧中立売警察署の基でデータを作成しております。心から厚く御礼申し上げます。

【参考文献】

- 1)犯罪統計書、京都府警察本部刑事部刑事企画課
- 2)防犯環境デザイン研究会 訳：防犯予防とまちづくり理論と米英における実践、丸善株式会社、2006 年
- 3)島田貴仁、鈴木護、原田豊（科学警察研究所）：犯罪不安と被害リスク知覚—その構造と形成要因—、犯罪社会学研究 第 29 号、2004 年
- 4)青木義次、湯浅義晴、大沸俊泰：あふれ出しの社会心理学的効果 路地空間へのあふれ出し調査からみた計画概念の仮設と検証 その 2、日本建築学会計画系論文集 第 457 号、1994 年 3 月